

日本におけるスポーツ教育を取り巻く諸問題とその解決策

The issues and solutions surrounding the sport education in Japan.

1K10C062-4 植田耕平

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 深見 英一郎先生

【序章】

近年、日本のスポーツ教育を取り巻く環境は、勝利至上主義による体罰問題や子どもの運動離れに伴う体力低下が問題となっている。このような日本のスポーツ教育の現状に対して、それらの諸問題の原因を明らかにし、その解決を導きたいと考えた。本研究ではまず、スポーツ教育の歴史について検討するために、スポーツ教育のルーツとされるイギリスにおけるスポーツ教育の取り組みについて取り上げることとした。次に、日本におけるスポーツ教育の変遷についても検討を加えた上で、日本のスポーツ教育が抱える課題を明らかにし、運動部活動や社会スポーツの視点から解決策について検討していくこととした。

本研究では、イギリスならびに日本におけるスポーツ教育に関連する資料に基づき理論研究で進めていく。

【第1章】

第1章では、スポーツ教育の発祥の地であるイギリスにおけるスポーツ教育の歴史と現状の取り組みについて検討した。イギリスのスポーツ教育の歴史を考える上で、中村（1978）は古典グラマースクールと非国教派アカデミーにおけるスポーツの取り組みについて検討する必要があることを述べている。その理由として、双方の取り組みが19世紀から現代に至るまでのパブリックスクールにおけるスポーツ教育の考えに大きな影響を与えていることがあげられる。

「イギリスにおけるチームゲームに類する近代スポーツの原型がパブリックスクールの中で熟成されたのは決して偶然でなかった」（中村, 1978, p. 55）と述べられているように、現代のイギリスのスポーツ教育では、チームゲームに非常に重きを置いている点に特徴があるといえる。しかし、その一方で、90%前後の生徒たちが、自主的に好きな競技を楽しんでいるという現状もみられた（鈴木, 2002）。これらのことから、イギリスではスポーツに対する価値観の変化に対して、伝統を大切にしながらも柔軟に対応し、多くの生徒たちが積極的にスポーツに取り組むことができる環境が保証さ

れていることが明らかになった。このように伝統を重んじながらも、時代に合わせた新しい取り組みに挑戦していくイギリスのスポーツ教育の姿は、根性論や体罰といった旧態依然な問題を抱える日本のスポーツ教育にとって大いに参考すべき点があろう。

【第2章】

第2章では、19世紀末に日本へ欧米のスポーツが輸入され、高等教育機関の課外活動として定着したところから遡り、大日本体育協会の設立から日本国内でのスポーツ教育の発展、そして戦時下の日本におけるスポーツ教育の取り組みまでを検討した。これらのことから、欧米から輸入された日本のスポーツ教育は、大きな戦争を通じてスポーツ教育による思想善導策が導入され、スポーツが政治的に利用されることとなった。これによって、日本におけるスポーツ教育は欧米のものとは全く別なものとして、独自の方向へと進んでいったことが明らかとなった。

【第3章】

第3章では、学校教育で行われている体育授業ならびに運動部活動における現状と課題について検討した。それらの特徴として、学校教育の枠組みの中で封建的な制度を有し、指導者対生徒、上級生対下級生といった絶対的な階層構造の中で行われていることがあげられる（枅本, 2001, p. 277）。また、教師は学校の校務と並行して運動部活動の指導を行うために、休日さえも返上して指導にあたらなくてはならない。さらに、専門的知識のない種目の指導を任されるなど、運動部活動を取り巻く環境は厳しいといえる。また、日本における地域のスポーツ活動の取り組みにも着目し、学校と地域が連携して行うスポーツ教育の在り方について検討した。その結果、日本のスポーツ教育は、生涯スポーツという考え方を大切にしつつ、学校と地域が連携を図りながらスポーツ教育を推進していくことが重要であるということを確認した。